

第6回藤原正彦エッセイコンクール入賞作品 講評  
(審査員 藤原正彦姫路文学館長)

【中学生部門】

例年に比べてレベルが非常に高く、びっくりした。入賞者3人の作品は誰が最優秀賞になってもおかしくないほど素晴らしく、大変困らされた。

最優秀賞「ノクターンの雨」(大屋莉々花さん)

半分は散文、半分は詩のような特殊な文体だが、そこに中学生らしい感性があちらこちらにみなぎっているところに魅力を感じた。たとえば、「軽やかに鼓膜を叩いていたはずのピアノの音に、ある時から息が詰まるような思いがして」とか、「もう、「好き」という何よりも美しい感情を自分の手で殺さないようにしたい」といった表現。なかでも「再び鍵盤に触れることを望んでしまった指先は、その日授業が終わるまでかすかに震えていた」は、すごい文章で感心した。そのあとに続く「夏、夕暮れ、雨上がり。空の真ん中で白く輝いていた太陽がオレンジ色に傾いて。」はそのまま詩である。

優秀賞「NY五十二番街」(菊地 馨さん)

文章の完成度、熟成度の面では断トツで、このまま全国の雑誌や新聞に載せてもまったく遜色ないものである。完成されすぎて中学生らしい欠点は何ひとつ見つからず、その分魅力がそがれたといったところだが、作品としての質はものすごく高い。

佳作「愛着について」(中 洋貴さん)

祖父からもらった紫陽花の木を愛する自身の気持ちから、親が子を育てるうちに深まっていく愛情の話へと発展させ「愛着」についての論に持っていくあたりは、中学生にしてはなかなか小癩な素晴らしい論法である。

【高校生部門】

最優秀賞「暗室の蛹」(青木望愛さん)

「小さな頃から待ち焦がれていた「十六歳」は思っていたよりも呆気なく過ぎ去ってしまい」とはうまい文章。高校生の将来の見えない悩みを非常に鋭く上手に描いている。「大きすぎる「自由」の重みについても触れているが、これは本質的な指摘。自分の能力や将来に対する不安は、じつは高校生だけではなくどんな人でも持っているし、いくつになっても人は

自分が歩んできた道がこれで本当によかったのかと悩むが、そのひとつの原因は「大きすぎる「自由」。すべて自分で決定しなければならないという意味で「自由」は最も大きな苦しみでもある。それを見事に指摘しており、高校生にしてここまで思考が及ぶとはたいしたもののである。感性も文体も魅力的。

優秀賞「自分の愛し方」(竹内彩花さん)

自分のことが嫌いだという作者が、ある作家のアドバイスによってだんだん救われていくというもの。具体的な経験から思考を重ね、深めていく点で非常に素晴らしい。

佳作「死に前旅行」(権 瑞香さん)

ネタ自体が素晴らしく、それを見事に生かしている。“死”と“生きる”ということへの考察や、おばあちゃんとの心温まる交流がうまく書けている。

#### 【一般部門】

最優秀賞「もう一つの生き方」(小川かをりさん)

ホームレスを題材にした随筆は初めて読んだ。最初は「ホームレス」という言葉がないので「何のことかな?」と思わされたが、読み進むと次第にわかってくる。ホームレスについて社会的視点から書かれたものもありふれているが、この作者は、何の偏見もない付き合いと観察を通してそこから浮かび上がるものを肩肘張らずに書いている。はっとするようなフレーズがいくつもあり、過剰な社会というものに対する批判にも触れている。とても面白く読んだ。

優秀賞「水玉もよりのチューブ」(林 久美子さん)

年老いた父との中学生時代の思い出。この作品の最も素晴らしいところは終わり方。「同じことを言ってくれた父は白髪になって、昔より頼りなげに笑う」という一行でパッと突き放している。プロ的な文章の締めくくり方である。

佳作「天使の水」(菱川町子さん)

モンゴルの草原の風がこちらの心にまで吹き抜けて来るような爽やかさを感じながら読んだ。ただ、なぜモンゴルの大学進学予備コースに通ったかといった説明がないのが残念。惜しいのは最後の4行。これは完全に蛇足であった。